

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 高<sup>たか</sup>田<sup>だ</sup>祐<sup>ひろ</sup>彦<sup>ひこ</sup>

本論文は『源氏物語』が、神話、和歌、漢詩、物語、日記といったさまざまな源泉から主題や話型、素材、表現等々を貪欲に吸収して生成を遂げながら、しかも時代を超え、国を越えて読まれ続ける普遍性と高い芸術性とを有する巨大な作品となった機構を解明するとともに、そのような『源氏物語』を通して立ち現れてくる豊かな平安文学史像を闡明することを企図したものである。論文構成は「Ⅰ 源氏物語と王朝文学」「Ⅱ 方法をめぐる視角」「Ⅲ 作中人物からの展望」の三部からなる。第Ⅰ部では、『源氏物語』が先行諸作品から継承し深化させたものが何であったのかを解明し、第Ⅱ・Ⅲ部では『源氏物語』の、それら先行諸作品から高く抜きん出た文学的達成がいかんにして可能になったのかという問題をさまざまな視点から分析する。第Ⅰ部と第Ⅱ・Ⅲ部とは、以下にその大略をのべるように相互に緊密に関連し照応している。

まず第Ⅰ部の「1 かな文学創造」「3 古今・竹取から源氏物語へ」等の章で、高田氏は、『古今和歌集』の歌や『竹取物語』において発見された、愛執の苦と不可分なものとしての「あはれ」という主題が、『源氏物語』全篇の根幹的な主題となっていることを指摘する。その上で、第Ⅲ部「4 身のはての想像力」において、柏木と六条御息所的心情表現における引歌や歌語の精細な分析を通して、その主題がいかんして芸術的に密度高く形象されているかを詳細に検証し、さらに第Ⅱ部「2 〈結婚拒否〉の思想」において、同じ「あはれ」の主題が、この物語に繰り返し現れる〈結婚拒否〉の主題とも密接に関連していることを明らかにしている。物語の奥行きを深さを指摘した、すぐれた考察である。また第Ⅰ部「6 道綱母から六条御息所へ」では、『蜻蛉日記』における道綱母の愛執と苦悩の表現が、六条御息所の生霊化へと継承・発展されていることを指摘する。一方、そこに示された六条御息所の人物造型の方法は、第Ⅲ部「1 六条御息所の〈時間〉」においては、古来議論の多い御息所の年齢の矛盾が、逆にその方法の特徴的なありようを示すものであること、また右に関連して、第Ⅱ部「3 長編の始動」では、単線的な「年立」では捉えきれない、この物語固有の時間の構造が存在することが明らかにされている。いずれも従来の議論を一段と深めた卓説といえる。さらに、第Ⅰ部「5 史部王記のまなざし」において、光源氏の造型に嵯峨・醍醐源氏の文化的理想性が継承されていることを丹念に論じているが、第Ⅲ部「2 逆境の光源氏」「3 光源氏の復活」においては、物語の表現と構造に即した分析を通じて、それをさらに具体化する考察が深められている。第Ⅱ部「4 引用の創造性」においても、逆境を経て復活する光源氏の造型に、神話の引用と相拮抗するような形で和歌や漢詩が引用されていることに着目、その神話的な英雄像の内面に、人間的な心情と文化的な理想性が充填されている様相が明らかにされている。

このように、本論文は、個々の章が相互に有機的に結び合うことで、『源氏物語』を貫く主題が自ずと浮かび上がるような構成をもっており、それを通じてこの物語の文学史的な位相——先行諸作品との関連やこの物語独自の達成のありよう——がきわめて明瞭に打ち出されている。この点が本論文のもっとも高く評価しうるところである。

なお、本論文においては、歌語の分析が図式的になっている嫌いがあり、また本居宣長の「もののあはれ」の理解がやや一面的に過ぎるといふ難点も見受けられるが、しかしながらそれらは本論文全体の価値をいささかも減殺するものではない。よって審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。